

## 第37回ペストロロジー学会北海道大会報告

編集委員会

1985年、PCOのための学問を模索し、その技術体系を作りあげることをめざして旗揚げしたのが「日本ペストロロジー学会」です。学問的研究や技術的開発の場として研究発表大会をもち、全国的規模で研究者、技術者、あるいは実務者にいたるまで、その相互啓発・学問的交流・情報交換・懇親を図ることを目的としています。現在、正会員288名、団体会員63団体が所属し、全国各地で年次大会の開催と年2回学会誌を発行しています。現場の最新情報、最新技術を収集し、業界や研究者と親しく交流できる絶好の場となっています。

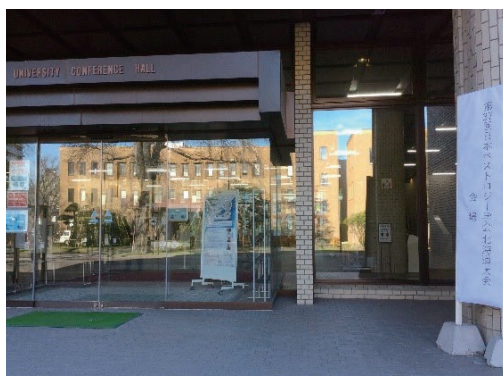
今年はコロナパンデミックの影響により、評議委員会、総会はオンラインで開催され、大会は特別講演、シンポジウム、受賞講演、表彰式等を現地での対面式で1日のみ行い、一般講演はオンデマンド配信による開催となりました。



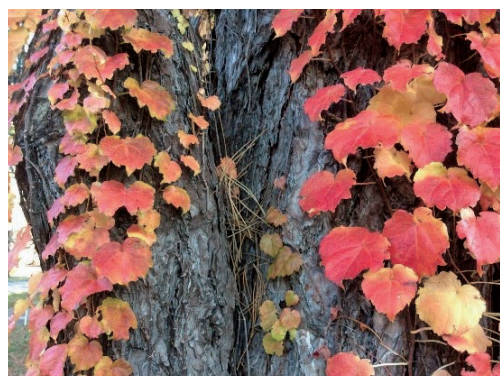
北大 ポプラ並木



北大 銀杏並木



北大 学術交流会館



構内の蔦の紅葉

## 《開催日》

評議員会 令和3年10月27日(水)  
総 会 令和3年11月9日(火)  
大 会 令和3年11月18日(木)  
会 場 北海道大学学術交流会館  
大会長 伊東 拓也(北海道立衛生研究所感染症センター)  
実効委員長 藤村 忠明(北海道ペストコントロール協会会長)



伊東大会長挨拶



平林学会長挨拶

10:10~11:50 特別講演 新たな課題Ⅰ. — 新型コロナウイルス感染症 —

演題① 感染症対策における「環境」のペストロジ

講師：藤谷 好弘(北海道立衛生研究所感染症センター) 座長：江下 優樹

環境の清掃消毒は新たなパンデミック発生時にも重要である。ネズミや害虫に限らず、包括的なペストコントロールを目指し一緒に対峙いただきたい。

演題② 札幌市における新型コロナウイルス集団感染対策

講師：寺田 健作(札幌市保健福祉局保健所) 座長：高橋 健一

COVID-19の特徴を解説、これまでの集団感染事例を踏まえて感染対策強化のポイントを解説、ワクチン接種の重要性とともに今後の在り方を提案された。

13:00~13:20 次期大会長挨拶 澤邊 京子

2022年12月5日、6日に埼玉会館で開催する。懇親会も行いたい。

## 表彰式

学術奨励賞 白井 正樹(横須賀市におけるフン害発生地点のサギ類の飛来パターン)

第3回学術功労賞 平尾 素一

# 第37回ペストロジー学会北海道大会報告

13：20～13：50

## 第3回学術功労賞受賞講演

「研究テーマはすべて現場にあった」

1972年に電器業界の研究職から防除業界に転職した。まず虫混入問題に直面した。そこで性フェロモンについて様々な事例研究に取り組み学会報告をし、顧客へのアドバイスの根拠とした。



受賞講演 平尾 素一氏

14：00～16：00 シンポジウム 新たな課題Ⅱ. — 注目すべき害虫と対策 —

演題① 北海道に侵入したキンパツヒメクロバエの一種 *Pollenia pediculata* について

講師：伊東 拓也 (北海道立衛生研究所感染症センター)

演題② 北海道への侵入が危惧される節足動物媒介感染症とそのベクター

— 蚊とマダニの分布状況と防除法の検討 —

講師：澤邊 京子 (国立感染症研究所・昆虫医科学部)

ヒトスジシマカの北限は青森市までで北海道では確認されていないが温暖化と相まって今後デング熱の流行も懸念される。マダニが媒介するSFTSもしかりである。殺虫剤による駆除対策も必要となる。

演題③ PCOが携わる昨今の業務と社会的な役割について

— PCO としての見解 —

講師：田中 康次郎 (フジ環境サービス)

食品工場や製薬工場では昆虫相調査は日常的に行われるようになり、薬剤の使用は制限されるようになった。一方で感染症や特定外来生物の防除がPCOに期待されるようになってきている。

総合討論 司会・進行：田中 康次郎

PCOは統計に用いる標準産業分類では「その他の建物サービス」に、ハローワークで用いる標準職業分類では「清掃の仕事」となっている。PCOは高病原性鳥インフルエンザ、デング熱媒介蚊の駆除、今回の新型コロナウイルス感染症の消毒、ヒアリなど特定外来生物の駆除など様々な分野で期待されているので、生活衛生や公衆衛生のサービスの仕事が妥当である。都道府県協会の活動がますます重要となっていることが提唱された。



## 一般講演(オンデマンド配信)

### (ゴキブリ)

- ・ 鹿児島県臥蛇島で採集されたゴキブリ属の1新種記載(ゴキブリ目, ゴキブリ科)  
小松 謙之(シー・アイ・シー), 飯尾 英郎(奈良の鹿愛護会)ほか  
ツヤアカゴキブリが報告された。
- ・ 川崎市内飲食店における難防除ゴキブリの駆除と確認された抵抗性  
堀口 智博、数間 亨、皆川 恵子、橋本 知幸(日本環境衛生センター)  
ピレスロイド剤が効きにくい飲食店でプロペタンホスMC剤による残留処理を行ったところ、処理前に43.7のゴキブリ指数が1か月後には0.4まで減少した。
- ・ 新規殺虫剤 テネベナール®(一般名:ブロフラニリド)の飲食店におけるチャバネゴキブリ駆除試験  
鈴木 征敏<sup>1)</sup>、佐藤 一行<sup>1)</sup>、菅野 格朗<sup>2)</sup>、前田 浩志<sup>2)</sup> ( <sup>1)</sup> 三井化学アグロ、<sup>2)</sup> 環境機器)  
難防除の飲食店において50倍希釈で散布したところ、1か月後に駆除率は60～96%であったが、2か月後には全物件で95%以上となり、遅効性であるが高い効力と長期残効性が確認された。

### (ネズミ)

- ・ クマネズミ捕獲におけるネズミ調査ブロックの有用性  
松下 明文<sup>1)</sup>、長岡 慧<sup>1)</sup>、小泉 亮子<sup>2)</sup>、清川 泰志<sup>3)</sup>、谷川 力<sup>4)</sup> ( <sup>1)</sup> 大丸合成薬品、<sup>2)</sup> 農研機構、<sup>3)</sup> 東京大学、<sup>4)</sup> イカリ消毒)  
クマネズミの捕獲カゴ用の餌材として長期間使用できるネズミ調査用ブロックと生エサのサツマイモとを比較したところ同程度に有用であった。

### (蚊)

- ・ 横浜市内の一公園におけるヒトスジシマカ生息状況調査  
伊藤 真弓、小曾根 恵子、宇宿 秀三、田中 伸子(横浜市衛生研究所)
- ・ 横浜市内公園における人囮法によるヒトスジシマカ成虫採集成績  
小曾根 恵子、伊藤 真弓、宇宿 秀三、田中 伸子(横浜市衛生研究所)  
5年間の合計でヒトスジシマカが76.4%、アカイエカ群が19.7%、その他にはキンパラナガハシカとヤマトヤブカ等が採集された。

### (ダニ)

- ・ 川口市におけるカベアナタカラダニ 4年間の捕獲調査記録  
梶山 知代、牛頭 夕子、川口 侑子、谷 真央、田辺 堅太郎、佐々木 均( (株)フジ環境サービス)  
2018年から4年間にわたって川口市内にある社屋周囲4か所で粘着トラップにより捕獲

# 第37回ペストロジー学会北海道大会報告

したところ、11,000～31,000個体が2月下旬から5月中旬まで捕獲された。

## (食品害虫)

- ・タバコシバンムシ7系統の発育期間

木村 悟朗(イカリ消毒)

羽化までに31.0～38.3日であった。

- ・ヒラタチャタテの走光性について

田中 康次郎、早川 洋一(フジ環境サービス)

紫外領域と青色可視領域の誘引性は赤色、緑色よりも有意に高かった。

- ・絶食時におけるコクヌストモドキ及びヒラタコクヌストモドキ成虫の生存日数について

渡邊 美和、牛頭 夕子、梶山 知代、鈴木 玲子、秋山 晴香、渡辺 信子、田中 康次郎、

佐々木 均(フジ環境サービス)

コクヌストモドキは餌があると40日、ないと34日、ヒラタコクヌストモドキは餌があると32日、ないと15日だった。

## (ゴケグモ)

- ・セアカゴケグモはバルーニングするのか

田中 豊一、田中 敏夫、三宅 稔、齋藤 祐輔、原田 曜男、濱田 剛志(株ダスキン)

通常のクモのように糸をたらし空に飛ぶことはせず、凧のように浮かんで車や人に絡んで移動すると考えられる。

## (防除機器)

- ・ドローンによる感染症媒介蚊防除の試み

芝生 圭吾<sup>1)</sup>、五十嵐 真人<sup>1)</sup>、勝永 秀人<sup>1)</sup>、五百部 達也<sup>2)</sup>、劉 鴻軒<sup>3)</sup>、

岩田 稔<sup>3)</sup> (1) 鵬凶商事、2) 五百部商事、3) 古河産業)

ドローンにエンジン式ULV機を搭載し3mの高さで毎秒1m移動させフェノトリン5%液0.8L/m<sup>2</sup>散布したところ、50分後にヒトスジシマカは100%の致死率を得られた。

- ・ドローンを活用した新しいハチ駆除サービスの検証

齋藤 祐輔、三宅 稔、田中 豊一、原田 曜男、濱田 剛志(ダスキンターミニックス事業部)

ドローンに発電機と有線接続したバキュームクリーナーを取り付けハチ及びハチの巣の一部を吸引することができた。

- ・紫外線カット蛍光灯に昆虫誘引抑制効果はない

北嶋 康樹、廣 菜々子(茨城大学農学部)

屋内への侵入率は白色蛍光灯と紫外線吸収膜付き蛍光灯との間に有意差はなかった。

### (殺菌)

- ・ 新型コロナウイルス対応消毒業務の取り組み

佐々木 健、渡邊 徹、大山 克幸、奥村 龍一(東京都ペストコントロール協会)

当協会では新型コロナウイルス感染者を搬送した救急車及び軽症者宿泊施設の消毒に対し、連絡体制や消毒方法を整備し、出勤人員の確保のためメールやラインなどチャットアプリの活用、行政との夜間休日の待機手当の締結などの整備により対応に当たった。

- ・ 異なる温湿度がオゾンガス殺菌効果に及ぼす影響

高野 友二郎、小池 彩乃、芹澤 和泉(オーク製作所)

オゾンガスによる殺菌は相対湿度によって効果が増減し、68% RH以上の高湿度下の処理が適当である。

### (その他)

- ・ 新潟県柏崎市におけるブユ対策研究の実態とその後の住民活動

平林 公男<sup>1)</sup>、小暮 覚<sup>2)</sup>、小林 昌弘<sup>2)</sup>、池嶋 聖也<sup>2)</sup>、高橋 弘良<sup>2)</sup>、阿部 哲也<sup>3)</sup> (1) 信州大繊維、<sup>2)</sup> 別俣コミュニティセンター未来推進部、<sup>3)</sup> 株NSS)、黄 鴻堅(麻布大学)

- ・ 埼玉県における衛生害虫の同定検査(H29～R2年度)

儀同 清香、佐藤 秀美、長島 典夫、三宅 定明、成澤 一美(埼玉県衛生研究所)

今後は遺伝子学的な同定検査についても実施できるよう検討を進めていきたい。

- ・ クサビノミバエのリン化水素感受性

今井 利宏、岩本 啓秀、高橋 竜太(JT 葉たばこ研究所)

クサビノミバエはリン化水素に対して感受性が高く燻蒸により容易に駆除が可能である。